



イスラーム過激派：ケニアの商業施設襲撃事件とシャバーブ

2013年9月21日、ケニアの首都ナイロビの商業施設ウエスト・ゲートが襲撃・占拠され、米国人、英国人を含む多数が死傷した。各種報道機関は、ソマリアで活動していた「シャバーブ運動」（以下シャバーブ）が、事件を自派による作戦であると発表したと報じた。その一方で、イスラーム過激派の広報活動のモニターという観点からは、一連の広報活動を通じてシャバーブの組織としての一体性や統制が弛緩していることを示す兆候が見受けられた。

シャバーブは、襲撃発生当初から犯行主体であることが疑われ、実際、報道機関は22日には同派が「犯行声明」を発表した、と報じた。しかし、実際のシャバーブのよる広報活動は、以下のように推移し、情報発信の経路や発信された内容で混乱が見られた。

9月22日：「公式ツイッター」で襲撃を自派の作戦であると発表。

9月23日：シャバーブが、「襲撃犯名簿」など事件について同派名義のツイッター（注：上記の“公式”とは別のアカウント）で発信された情報を虚偽であると発表。問題のアカウントを削除。

9月24日：「公式報道官」アリー・デーレ、「軍事部門報道官」アブー・ムスアブが、ツイッター、Youtube、報道対応の形で個別に事件についてコメントを発表。また、内紛によりシャバーブに粛清されたとみられるアブー・マンスール・アムリーキーのシンパが、ツイッターで事件は自分たちの集団の作戦であると主張。

9月26日：ツイッターを通じ、シャバーブ「指導者」のアブー・ズバイダが事件を自派の作戦と主張する音声が発布。

一連の情報発信を観察した結果、今般の事件についてのシャバーブの広報活動について以下の点が指摘できる。

1. シャバーブの組織内で、どの人物（あるいはどの部門）が作戦を実行や情報発信を担当しているかが不明確である。また、実行部隊の出撃場面や遺言のような、犯行主体しか持ち得ないような情報は、シャバーブの発表には含まれていなかった。
2. 発表内容には、ケニアに対する報復であるとの趣旨や、ケニアを支援する西側諸国に対する言及が共通事項として含まれていたが、断片的で一般的な言及にとどまった。
3. 情報の発信は、ツイッターや報道対応を通じて行われた。シャバーブは、近年同派が擁する「カタール広報製作機構」よりも、ツイッターを通じて戦果や論評を発表する傾向にあった。その結果、迅速な情報発信が可能になる反面、情報発信の責任の所在が不明確になるとともに、即興的・断片的な情報以上の発信が行われないう、広報上の問題点も発生していた。
4. 情報の発信の際に、「偽情報」や対立する分派とおぼしき集団による発信が混入したことにより、シャバーブ自身が断片的に発信する情報についても信憑性や広報効果が損なわれた。

一般に、イスラーム過激派は武装闘争の戦果を広報活動と効果的に連動させ、彼らが敵とみなす「十字軍とその仲間」に対し実際の軍事的な損害よりもはるかに大きな心理的・政治的な

打撃を与えることを意図して活動してきた。しかし、シャバーブは、今般の作戦について、「作戦が間違いなく自派の活動である」と証明するような情報も、「敵対者（この場合はケニアだけでなく、西側諸国やイスラエル）に要求事項や脅迫メッセージを明確に伝える」情報も発信しているわけではない。その結果、シャバーブの広報活動は断片的で、大局的には自派の力の誇示や、イスラーム過激派の中での威信向上につながるとは思えない、分散した非効率的な活動にとどまった。さらに、情報発信者が複数になり、「偽情報」までもが混入した結果、組織の意図や具体的な事実を発信する上で最も権威と信憑性のある発信主体が不明となった。通常、イスラーム過激派諸派による戦果の発信は広報部門に相当する部門が一括して行っており、複数の主体がおのおの断片的に情報やコメントを発信する状況は、組織の統制の上からも好ましいことではないだろう。ここから、シャバーブが今般の事件について企画・実行・広報の各段階で組織として統一的な意思の下で行動したか疑念が生じることになる。また、一連の広報活動を、シャバーブの組織としての統制や意思決定の経路が弛緩・混乱している兆候とみなすことも可能である。

事件を自派の作戦と主張したシャバーブ、あるいはその分派が、今後短期間の中に信憑性の高い情報を発信し、事件の広報効果や組織の名声を高めるために必要な広報活動を行うことができないならば、組織の弛緩や混乱についての疑念を払拭することはできないだろう。この襲撃事件は、個別の事件としては被害規模や社会的衝撃度が大きい事件ではあったが、犯行主体とみなされたシャバーブの活動能力や広報活動の信憑性については、むしろ疑念を生じさせる結果に終わったといえる。

（イスラーム過激派モニター班）